

小倉ゼミナール 6月第4ゼミ報告

I 事務概要

1. 日時

2012年6月24日(日) 13:30~17:30

2. 場所

放送大学 東京文京学習センター 2階 学習相談演習室1

3. 出席者

小倉行雄先生

M2 杉山 坂井 2人、M1 安原 梅津 2人 小計4人 総計 5人

4. 時間割

13:30~14:30	学びの方法、書く方法	小倉先生の講義
14:30~14:45	休憩ストレッチ	
14:45~16:00	君塚さんの卒業研究レジメの検討(グループ討議)	司会 梅津
16:00~16:15	休憩ストレッチ	
16:15~17:25	岡本さん6月宿題レポートの評価(読みとり)	司会 梅津
17:25~17:30	今日のまとめ、一人一言発言	

II ゼミ内容

はじめに

6月第4ゼミは、大きく3つの内容からなる。第1は、4月からのゼミの流れを踏まえた学びの方法、書く方法に関する講義である。小倉先生は、4月から学びの方法、書く方法について折々に解説されてきた。そこでこれを整理した。講義資料は、前日の6月第3ゼミで配付されたものが使われた。しかし講義トピックが前日と異なるので、内容的にはまったく別個のものとなった。

第2は、君塚紀子さんの卒業研究レジメに関するグループ討議方式での検討である。これも前日のゼミで行ったことである。同じ素材で2日間検討したことになる。しかし、参加者が違うため、同じ素材でも検討内容は違ってくる。ゼミ生は、両方の検討内容からそれぞれ気づきを得ることができる。

第3は、岡本吉弘さんの6月宿題レポートの検討である。岡本レポートは、6月宿題の提出期限よりやや遅れて提出された。このため、6月ゼミでは取り上げる対象にならな

った。しかし小倉先生の評価は相対的に高く（後述の点）、本ゼミでの検討素材になった。

1. 学びの方法、書く方法

小倉先生から、最近のゼミにおける実践の意義について講義があった。これは、ゼミとゼミ生を成長させる方策に焦点をあてた内容である。

（1）最近のゼミにおける注目すべき実践の紹介

今回を含む第2ゼミ以降の回は、遠隔地のゼミ生の出席がなかなかむずかしい。一方、ゼミの内容は参加者どまりにしておくにはもったいないことが多い。そこで、2012年の6月第2ゼミ以降という最近の実践に絞り、2、3の注目すべきゼミ運営手法について述べておく。これにより、ゼミ内容の一部の紹介に代える。

①3つのラベルによる整理法

3つのラベルによる整理法は、6月第2ゼミ（6月10日）において前日の6月定例ゼミ内容を整理するためにとった方法である。これは、少数要因への集約手法であり、見える化を伴う優先度づけの手法である。これにより、複雑なゼミ内容でも時間をかけず、少数の特徴要因に集約整理できる。

②二分法、二者択一法による問題展開と実践

この手法は、今回ゼミの前日となる6月第3ゼミ（6月23日）において行った。君塚さんのテーマに関するレジメを取り上げ、その問題点を検討し、どう改善するかの方角性を見出すためである。より具体的には、テーマや論点に関し、大本の基本的なところで問いを二分したり、二者択一なかたちにする。これによる問いと答えを繰り返し、核心となる部分に迫るやり方である。

二分法で問題を展開する方法とは、より一般的なかたちでいえば、複雑な問題はまずそれを構成する基本要素にわけるところから問いを返す。このため、問題の元となる部分に立ち返り、そこから問いを返す。これにより、問題を下位段階に分解していく。こうして、全体構造の成り立ちを明らかにする。

③学びに関し、自分が置かれた客観的な位置を知る

放送大学における学びを効率的で効果的なものとするには、学びを始める前の前提条件をよく確認しておくことが大事になる。ところが、学びを始める前の前提条件は、日頃、あたり前とされていることであり、それゆえ明確な意識にのぼらない。これを浮き立たせるには、何らかの基準や軸を持ち込むことにより、学びに関して自分が置かれている客観的な位置について自覚することが必要となる。

こうしたものの一つに前日の6月第3ゼミにおいて行われた社会人の効果的な学び方に関する講義がある。そこでは、論文づくりに取りくむ場合における最低限の条件があった。これは実用日本語力を駆使できるかどうかということである。そこで、社会人が論文づくりの学びを始めるにあたっては、この程度の最低限の基礎力を持っているかどうか自身に問うてみないといけない。ちなみに、これが可になるとしたら、この先にやることもいっておこう。そうすると、それは身近なところで自分なりの学びの武器となるものを探し、その開発に努めることである。

(2) 考える方法は どうやって身につけるか

考える方法といえば、大方の印象では、もっぱら頭脳活動の所産であるように受けとめるであろう。しかしこれは頭脳活動に間違いはないが、単なる頭だけの活動でないことにも注意しなければならない。考える方法は、訓練して体得するという側面に注目していえば、頭だけでなく、体全体で行うものである。またそうであるからこそ、訓練を積めば瞬間で対応できる反射運動的な業（わざ）になる。

このように、考える方法は体得的であり、体全体で行うものである。かといって、それが個人に特有なものであり、個人間でまったく異なるものかといえば、そうとはいえない。考える方法には、正しい方法とそうでない方法が明確にあるからだ。そこで、考える方法を身につけるポイントについていえば、正しく考える方法を学び、それを体得するために必要となる訓練を積むことにあるといえよう。なお、ここでいう考える方法の正しさを判別する基準は、長期的にみて成果につながる方法かどうかにか置くのがよいであろう。

(3) 通信教育と訓練の必要性の折り合いの悪さ

このように、考える方法を身につけるには、正しい方法を知ることとあわせて訓練が必要になる。ここで放送大学の論文指導ゼミを含む通信教育の実情に話を戻す。そうすると、そこでは遠隔地に居住する学生の都合という現実的制約に配慮するあまり、正しい方法を知ることとはむろんとして、一体に訓練の実行が欠落しがちである。

しかし、一定レベルの技能を身につけるには、どんなことでも訓練的要素が欠かせない。これを考えると、放送大学における教育と現実の間に齟齬があることはよくわかる。実際、通信教育による中途半端な力では、現実の課題を解決するには不十分なことが多いであろう。とはいえ、通信教育に実体的な内容を入れ込もうとしたら、カリキュラムにおける訓練の欠如という制度的な壁が立ち上がる。では、こうした現状突破に関する袋小路的で堂々巡りの状況から抜け出るには、どうすればいいか。これには、通信教育の下でも可能なかたちの訓練的要素を工夫して取り込むことしかない。

たとえば、小倉ゼミの場合でいえば、毎月の宿題回答の提出や、各回ゼミ毎でゼミ報告作成のための素材提供メモの作成をゼミ生に課している。これらのかたちで書く量をまとめると、半端なものではない。ここには、通信教育であっても工夫次第で訓練的要素は十分折り込めるといふ一つの見本がある。

(4) 「1万時間の法則」により、閾値（いきち）の目途をつける

論文づくりは、積み上げと時間的蓄積を要する仕事であり、一定時間の投入が欠かせない。ところが、社会人の場合は、一定時間の投入を要求すれば端から脱落してしまう。

では、こうした課題はどのように受けとめ、どう解決すればよいのであろうか。これには「1万時間の法則」を踏まえるのがよいと思われる。ここで1万時間の法則とは、語学や各種の体得的スキルの習得などに関して経験的にいわれることである。すなわち、仕事を持つ通常の間人が1日3時間の余暇時間を使って、何かの習得に努めるとする。この場合、1年間の累計でみた投入可能時間は、1日3時間×365日で約1,000時間になる。したがって、これを10年続けるなら、累計投入時間は1万時間になる。そして、これだけの累計投入時間を確保できれば、普通の能力の人が普通の生活を送るといふ条件の下で、

どのような問題であれ、専門家の域に到達できるという教えである。

論文づくりを実際に行うには、社会人であっても一定時間の投入が要求される。そこで、1万時間の法則を厳格にそのまま適用するかどうかは別にして、こうした考え方を社会人の日常生活に折り合わせる必要がある。これには、どうすればよいか。これは自分が抱える問題に関して、1万時間の法則も参考にし、累積でどの程度の時間投入ができそうか、まずあらましの目途を立てる。その上で、自分が取りくむ課題は、時間的な蓄積と成果が結びつきやすい問題に絞っていく。なお、そこには論文づくりの下作業が業務として行えるような問題に絞ることも有力な選択肢になる。

2. 君塚さんの卒業論文レジメの検討

次に、君塚さんの卒業論文レジメを検討した。これも前日の6月第3ゼミで行ったことであり、2回続けて同じテーマにより検討したことになる。しかし、内容的には同じものでない。

(1) グループ討議の実際展開

君塚さんのレジメの検討は、前日と同様にグループ討議方式で行われた。司会は、この日も筆者（梅津）が務めた。これは両日の参加者が筆者だけであり、残りの参加者は前日とまったく異なるメンバーであったからである。筆者は、昨日も同じ課題で司会を行っているので、比較的楽な気分グループ討議に入った。

ところが、討議に入っただけで、前日に同じ内容でやったからといって順調に討議が進むとは限らないことを思い知らされた。それというのは、筆者は初めにゼミ生に対して、君塚さんのレジメを見て「どのような論文を書くかわかるか」との問いかけをしてしまった。後から思えば、これが誤りであった。しかも、それは前日に自分が聞いてうまくいかなかった問いとほとんど同じものであった。いかに思考の慣性が強いかわかる。しかしこれでは自分はポイントを突いて聞いているつもりでも、聞かれる方からすると漠然とした問いであり、何を答えていいやらわからない。当然、参加者の答えは出渋ることになる。このため、前日の問答や、先生が言われていたことを思い出そうとした。そうしてやっと、「このタイトルに問いがあるかどうか」を聞けばよいことを思い出した。これで参加者に聞いてみると、一様に「問いがない」との答えになった。

そこで、次は「問いがない」とする理由について聞いてみた。だが、ここでも参加者の回答に引き回されるだけで、議論を引っ張ったり、整理するところにはいかない。小倉先生の書き込み資料をみても、適切な発問は思いつかない。昨日、先生の展開方法を聞いていたはずなのに、うまく議論をリードできない。これは、ゼミ生の発言や回答を聞きながらその場で考え、次に何が適切な問いになるかという読みや対応ができないからである。知っていることとそれができることは、別問題であることをつくづく思い知らされた。

(2) レジメ内容の発展方向

こうして、グループ討議の進行は、小倉先生に再び助けられることになった。これにより、何とか結論らしきところまで辿り着いた。その中で、先生からは、昨日とまた違う視点からの問題に対するとらえ方が示された。

それは、「NPOと業務委託」というかたちで出されている問題の中に、図書館の業務委託のあり方の問題を読みとるべきということである。ここからは、外部の専門的能力の活用という視点が視野に入ってくる。すなわち、図書館におけるアウトソーシングのあり方というかたちで検討する方向が出てくる。さらに、そのことと関連し、アウトソーシングに適する図書館業務とは何か。あるいは、外部に出すのが適切でない図書館の業務とは何かの問いも出てくる。つまり、図書館の業務における専門性とは何かを問うことである。こうしたかたちで問答を深めていくと、まだまだ追求すべき課題は一杯ある。

3. 岡本さんの6月宿題回答に関する検討

次に岡本さんの6月宿題回答を検討した。岡本さんの6月宿題回答は、期限日過ぎの提出であったため、6月定例ゼミの優良解答の検討対象には入らなかった。しかし、小倉先生の評価は高く、今回の6月第4ゼミでの検討課題になったものである。なお、6月宿題は、「構成」がテーマであった。

先生からの指示により、ゼミ生はこのレポートの評価を「3つのラベルへの書き込み」方式により行った。その結果は、読みづらい、わかりにくい、結論が明確でないなど、消極的な評価の印象が強いものであった。これを先生が板書で示された岡本レポート評価の3点と対比すると興味深い。ゼミ生の視点は、表面的で目先の印象に左右されがちなものであり、背後にある構造的なものには及びにくい現状にあるといえる。

ちなみに、先生が岡本レポートに対して評価された理由は、次の3点である。

①自分なりの構成をしようという姿勢がある。

②文章を書く上で自分なりの型がある

これは議論を展開する上での筋道を心得ているということであり、別のテーマであれば、図表的に整理したりして論点を提示できる力があることを指す。

③それなりに自前の意見を提示できる

おわりに

今回、グループ討議の司会役を2回続けてやり、「知識レベル」のことと「やれる」こととの間には、大きな距離があることを痛感した。小倉先生の講義で示された1万時間の法則ではないが、「知っている」や「教わった」という状態から「できる」状態に持って行くには、絶えざる訓練が必要になる。物事を体得するには、やはり一定の時間を投入して、転化ラインとなる閾値(いきち)を超えねばならない。

また、ゼミの休憩時間中には、M2の方から次のようなことを聞いた。すなわち、前年度(2011年度)の場合でいえば、文章を書く上で前提となる表記・書式の問題も夏場まで何の意識もなかった。また、今年度(2012年度)に比べて、書く機会は圧倒的に少なかったということである。これを聞いて、ゼミのやり方がわずか1年でこれだけ違うのかと感心した。一方、文章を書く力でいうと、1年間小倉先生の薫陶を経たM2生と4月からのM1生の間には、かなりの実力の開きがある。これからすると、M2生の努力もさることながら、先生がとられてきた指導方法がいかにゼミ生の力を伸ばすものであるか痛感

する。しかも、2012年度は、ゼミのいろいろな内容が前年度に比べ遙かに引き上げたかたちで展開されている。これは先生が教える方法や論文づくりの指導方法を常に新しく生み出し続けていることのあらわれに他ならないと思う。

このようにみてくると、われわれゼミ生は、先生の努力にまずもって感謝しなければならない。加えて、ゼミ生各自のできる範囲でよいので、もっと自分なりの反応や提案を示すべきであろう。